君告メモリア

雷星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君告メモリア

【Ｎコード】
Ｎ２７２７Ｌ

【作者名】
雷星

【あらすじ】
少年と少女の淡い青春の記憶。

気軽に読める短編集のようなお話です。

君告メモリア

「なんていうか、ね」

それは、ぼくが教室でカードゲームをしていたときだった。
君が話を切り出してくるのは、いつも唐突なんだ。君は、ぼくがなにをしていようと知ったことじゃないんだろうね、きっと。
天上天下唯我独尊ってほどじゃないんだけどさ。

「とても言いにくいことなんだけど」

いつも気丈な君が、なぜかしどろもどろなのは、ちょっと面白かったな。
カードゲームの対戦相手や、ヤジを飛ばしていた観衆たちも、君の登場には困ったみたいだった。
まあ、それもいつものことだよね。

「はっきり言うから、ちゃんと返答なさいよ？」

君の様子がいつもと違うから、ぼくも調子が出なかったんだ。
わけのわからないことを口走ったり、どうでもいいことで騒いだり、そんないつもの君になら、対応のしようもあるんだけど。

「付き合ってください！」

ぼくは、頭の中が真っ白になった。
君は、いつだって突然なんだ。　周囲の反応も凄かったけど、ぼくの頭の中のほうが大変だったんだよ。
予想し得ない君の言葉なんて、処理できるはずがないんだ。

だから、ただうなずくしかなかったんだ。

「じゃあ、いまから恋人同士ってことで、ヨロシク！」

君はいつもの調子で笑って、どこかへ走り去ったね。

ぼくはそれから大変だったんだよ。

みんなに冷やかされたり、からかわれたり。

なにより、ぼくは自分の幸福に満ちた表情を消すのに苦労したんだ。

だって、ぼくは君が好きで好きで仕方がなかったんだから。

君恋エイプリル

「月代サクヤです。えーと、転校してきたばかりで――」
「ツキシロサクヤ～？　変わった名前ね～！」

ぼくが君に出逢ったのは、桜舞う季節のことだった。
高校二年の春、父の仕事の関係でこの街に引っ越してきたぼくは、当然、転校しなければならなかったわけで。
見知らぬ土地に来たばかりで、不安しかなかったぼくを、君の存在が救ってくれたんだ。

「わたしは日上アヤ。この学園の――いえ、この宇宙の支配者よ！」
「え……？　あ、そう」
「そこは「なんでやねん！」って突っ込むべきところでしょ！」
「な、なんでやねん」
「乗りがいいのはわかったけど、イントネーションが違ーう！」

授業中でありながら、関西弁のツッコミを熱心な指導する君に気圧されることから、ぼくの学園生活は始まったんだ。
それはぼくにとって、まさに薔薇色の日々の始まりに違いなかった。

「まさか、あんたがわたしの隣の席だったなんてね―」
「ここしか空いてなかったけど？」
「ふふふ、甘い。甘いのよ！　角砂糖のように！」
「そりゃ角砂糖は甘いけど」
「じゃあキャッラメルマキアートのように！」
「なんでキャラメルマキアート……？」
「ふん、まいいわ。でも、見えないの？　教室の後ろに並ぶ机幽霊

が！！！」
「いや、そんなことを顔面蒼白になって言われても」
君のハイテンション振りはいつものことらしくて、教室のだれもが気にしてもいなかったんだ。
といって、黙殺されているわけでもなくて、君はいつもクラスの中心にいた。

「ねえねえ、アヤっぴ～。この問題なんだけど」
「こんなのもわかんないの？　もう一度小学校からやり直しなさいよ」

「なあ、日上。ラスエムの最初のボスが倒せねーんだけど」
「あー、あいつのこと？　あんなの弱々じゃない」

「日上さ～ん」
「あやや～ん」
「ひ～か～み～」

授業が終わると、もうとにかく君は引っ張りだこだった。
他愛ない話題を振られては大声で罵倒したり、授業やゲームに関する質問にも、口悪くも懇切丁寧に答えていたんだ。
いつだって明朗快活な君の周りには笑顔が絶えなくて、そこだけがまるで別世界のようなんだ。

「ところであんたには特技とかないの？」
「特技？」
「趣味でもいいわよ」
「うーん……」
「なんでもいいの。教えなさいよ」

「えーと……歌を歌うことかな。趣味って言えば」
「ふうん。じゃあ、今度聞かせてもらうわよ！」

放課後、特にやたくなるような部活動もなく、ただ意味もなく校内をさまよっていたぼくに、君は話しかけてくれたね。
君の唐突な質問に、ぼくはなぜだかとっても驚いて、緊張してしまったんだ。
さんざん迷った挙句に出した答えが「歌」だなんて。
へたくそ極まりないのにね。

「じゃあ、また明日」
「うん」
「名前、覚えたわよ。ばっちりね」
「ぼくも」
「そう！　よかった！」

別れ際、君の眼がきらめいたのが、強く印象に残ったんだ。
それからずっと、ぼくの胸は高鳴っていた。家についても、お風呂に入っても、布団を被っても、収まる気配がまったくなくて、大変だったんだよ。
いま思えばそれはきっと、君に恋をしたからなんだ。

君色ホリデイ

「あんた確か、この街のこと何にも知らないのよね？」
「うん。そうだけど」
「じゃあ、わたしが案内してあげるわ」
「ええっ！？」

君の申し出には度肝を抜かれたというか、なんと言うか。
ぼくは君の言葉が一瞬理解できなくて、パニックになったんだ。
だって、想像できるはずないだろう？
教室一の人気者が、転向してきたばかりのぼくを誘ってくれるなんて。

「なに？　嫌なの？　このわたしがじきじきに案内してあげようって言うのよ？」
「い、いや、ただびっくりしただけで」
「で、どうなの？　嫌なの？　いいの？」
「えーと……いいです」
「よろしい。じゃあ、次の日曜日、十時に校門前に集合。わかった？」
「わかりました」
「なんでかしこまるのよ、もう」

君のあきれたような笑顔は、可憐だと思ったんだ。
そのまま額縁に入れて飾っても絵になるくらいだった。きっと、大層な値が付くんだろうな。
そんなどうしようもなく馬鹿げたことばかり考えています。

「遅―い！　いつまでわたしを待たせる気？」
「え？　まだ十分前だけど……」
「言い訳はいらないわ。誠意を見せなさい！」
「えー！？」

君の傍若無人な振る舞いにはまだまだ慣れていなかったから、ぼくは、これから先だいじょうぶだろうか？って、不安ばかり抱いていたんだ。
そんなのはまったくの杞憂に終わったんだけどね。

「まずは腹ごしらえよ！」
「いきなり！？」
「ふっ、腹が減っては戦は出来ずって言葉を知らないの？」
「知ってるけど……」

とはいうものの、君はぼくのも含めてふたり分のお弁当とお茶を買っただけで、それをすぐには食べようとはしなかったんだ。
君の目的がなんとなくわかってきたけど、黙っていたよ。
君の悪戯っぽい笑顔をいつまでも見ていたかったんだ。

「ちょっと遠いけど、我慢してね」
「うん」

どれだけ遠くても構わなかったよ。
君と一緒に自転車を走らせているこの時間が、永遠に続けばいいと思ったくらいだったんだ。
だってぼくは、君に恋していたから。
まだ気づいてはいなかったんだけどね。

「ほら見なさいよ！　頑張って上ってきた甲斐があるってもんでし

ょう！」
「うわあ！　凄い！」
「地元では有名な花見の名所なのよ、ここ」
「日上さんのおかげだよ……！」

透き通るような青空の下、五千本にも及ぶ桜が、眩しいばかりに咲き誇っていたんだ。
風に飛ばされて舞い踊る無数の花びらが、君の勝ち誇ったような笑みを一層輝かせたね。
君は、この桜に彩られた公園の中で、だれよりも楽しそうだったよね。
ぼくだって、そんな君に負けないくらいに楽しかったけど。

「ありがとう」
「なによ、突然」
「日上さんが誘ってくれなかったら、こんな楽しいお花見なんて出来なかったんだ」
「楽しいお花見？　本当に楽しかった？」
「うん。嘘じゃないよ！」
「そう！　それならいいのよ！」

君がはにかんだように笑ったのは、結局のところなんだったのかな？
ぼくにはわからないけれど、まあいいや。
君の色彩に染まった至福の一日は、ぼくの記憶の中で永遠に色あせないものになったんだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2727l/

君告メモリア

2010年10月10日20時54分発行